

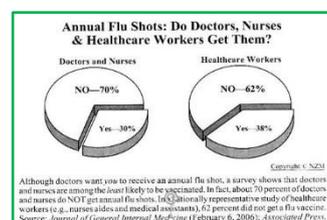
TRANSITION TO HEALTH (057)

季節性インフルエンザ・ワクチンは効かない！

～ ワクチン打っても感染・発症するワケ ～

はじめに

季節性インフルエンザの予防接種について、2006年の米国の医学誌 *Journal of General Internal Medicine* (Feb. 6, 2006) (右図: Vaccine Safety Manual 2012) によると、**医師・看護師の70%が接種を拒否**、他の医療従事者でも62%が拒否していた。あれから11年、今ではワクチン接種拒否はもっと進んでいるのではなかろうか。しかし、日本の医療機関では、社会正義と言わんばかりに職員全員に接種を強要しているところがある。任意接種であるにもかかわらず。

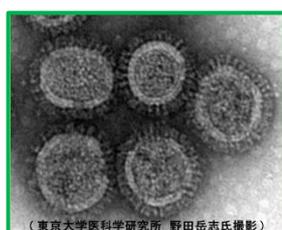


現行の“インフルエンザHAワクチン”は効かない！？

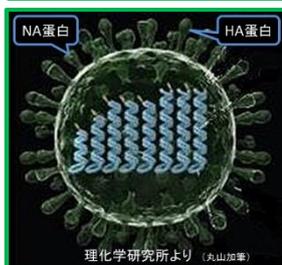
昨年、2016年1月に放送された民放テレビの或るインフルエンザ特集の番組で、元SMAPのメンバー草彥剛君（当時41歳）が解答者として出演していた。彼は、番組の冒頭、「**予防接種しているのにかかってしまって**」「**毎回予防接種している意味があるのかなあ？**」「**予防接種すると必ず調子が悪くなる**」「**結構イライラしていますよね**」等々訴えていた。しかし、当番組は彼の疑問・憤りに対して明確な回答はしていなかったため、私がここで答えてみましょう。

★ 「予防接種しているのにかかってしまって」・・・ワクチンでの感染防止は不可能！

先ず、インフルエンザ・ウイルスの構造を見てみよう。左図のようにウイルスの中心には遺伝子の核があり、それを

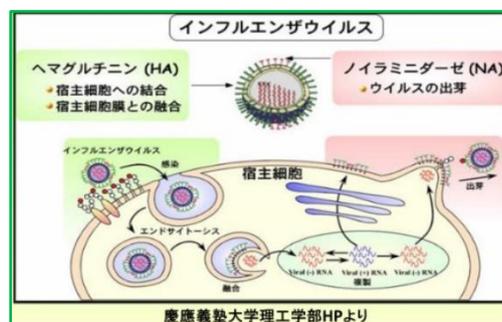


(東京大学医科学研究所 野田岳志氏撮影)



取り囲む表面の膜に **HA** (HemAgglutinin ヘマグルチニン)、**NA** (NeurAminidase ノイラミニダーゼ) と呼ばれる二つの棘の形をした蛋白質がある。**HA** 蛋白はヒトの鼻咽頭粘膜の上皮細胞の中に侵入する時に働き、もう一つの **NA** 蛋白は、最初に侵入した粘膜細胞内で十分増殖し、外に出る時（出芽という）、拡散する時に働く蛋白である。（下図参照）

現行のワクチンは、孵化鶏卵の中でウイルスを培養・増殖させた後、濃縮・精製し、生きたウイルス粒子丸ごとではなく、エーテルを加えてウイルス粒子をバラバラに分解・精製し、膜の一部である **HA** (ヘマグルチニン) という棘の蛋白質を取り出した後、ホルマリンなどの保存剤・安定剤を加えて完全に死滅



公益財団法人 静岡県産業労働福祉協会

〒421-0113 静岡市駿河区下川原 6 丁目 8 番 1 号

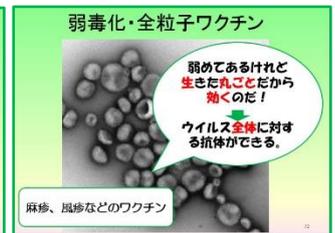
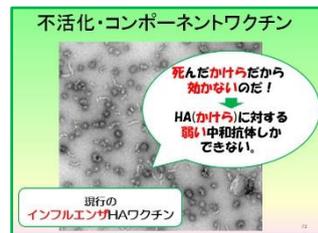
TEL054(258)4855(代) FAX054(258)4403

<http://www.kenshin-shizuoka.net>

E-mail: info@kenshin-shizuoka.net

させて造られるので、『インフルエンザ HA ワクチン』という。

このワクチンは、過去に流行った古い型（危険な致死的新型ウイルスでもなく、野生動物が保有する未知のウイルスでもない！）の“不活化&コンポーネント”ワクチン（スプリット型）、すなわち、弱毒ではなく“死滅”した、ウイルス粒子丸ごとで



はなく“部分的な欠片”で造られた生物由来の薬剤である。したがって、ワクチン接種によってできる抗体は生きたウイルス全体に対する抗体ではなく、死滅した欠片・HA 蛋白に対する抗体である。この抗体は血液中に存在する IgG 抗体であって、粘膜に存在して鼻水や唾液に出てくる液性の IgA 抗体ではないので、ヒトの鼻咽頭粘膜での感染は全く阻止できない。また NA 蛋白に対する抗体でもないので、増殖を防ぐことも全くできない。麻疹（はしか）のワクチンのようなウイルス粒子丸ごとの生きたワクチンではないので、“効かない”のはウイルス学を学んだ者、医学を学んだ者の“常識”である。ワクチンを接種する医師自身も「感染を防止するものではない」と認め、「重症化を防止するもの」という幻想を抱いて（ウソをついて??）、あらぬ期待をしているだけ（儲けているだけ??）である。

右図は TV 番組で用いられた図の一部である。国立感染症研究所の H 先生も番組の中で、「血液の中に抗体があっても『ウイルスに攻撃が届かない』とはっきり述べ、『増殖して症状が出る』と、図を用いて正確に説明していた。ワクチンを接種しても、インフルエンザの感染は阻止できないし、発症（ウイルスの増殖）も阻止できないと説明していた。しか



し、番組の意図を酌んでか「かかった後の重症化をこの抗体が防いでくれる」と苦しい説明をされていた。インフルエンザ・ウイルスが生存・増殖するために重要な 2 つの蛋白、HA 蛋白・NA 蛋白に対して全く無力なワクチンが重症化を阻止できるはずがない。ここで、インフルエンザワクチンに予防効果が無かったことを証明した事件を思い出してください。

2014 年（平成 26 年）の年末、静岡市内の S 総合病院で、入院患者・病院職員 183 人がインフルエンザに院内感染した事件です。この時、病院職員・入院患者への予防接種に加え、院内感染の初期段階で抗ウイルス薬の予防投与も行ってたと報じられていた。この事件は「インフルエンザワクチンに予防効果なし」を証明した典型的な事例であったと思う。

★ 「毎回予防接種している意味があるのかなあ？」・・・・無意味！ 毎回打つから感染し重症化もする！

全く意味がありません。“毎年毎年予防接種することで、逆に免疫力が阻害され、より感染し易く重症化もする”ことが、2011 年 11 月、皮肉にもワクチン推進派ともいべきオランダの科学者によって実証され、ウイルス学会誌に発表されました。事実、毎年ワクチンを打ちながら感染してしまう人が大勢いる一方で、ワクチンを一切打たないのに、何十年もの間、全くインフルエンザに罹らない人も結構いる。この論文の詳細については次号で紹介しましょう。

★ 「予防接種すると必ず調子が悪くなる」・・・・生物由来の劇薬だから

ワクチンの液体成分には様々な有害物質が入っているので、体調が悪くなることはよくあることである。ワクチンの添付文書には、水銀やホルマリンなどのことしか記載されていないが、動物細胞の培養で生じた細菌や野生のウイルス、猿や犬の腎臓、鶏、牛、人間の細胞、豚や牛のゼラチン等々が含まれているようだ（ワクチンに関する国際医学協議会『Vaccines : Get The Full Story』（2011.02）で警告）。日本のワクチンの添付文書には「生物由来製品」であり「劇薬」であるとはっきり書いてある。つまり、アレルギーやショックを起こす可能性があり、時に死に至ることも有り得るといことだ。人体に発癌性のあるホルマリン（ホルムアルデヒド）、保存剤としてチメロサルという神経毒である水銀製剤、モノによってはポリソルベート 80という“不妊誘発”疑惑が囁かれる物質も入っている。当たり前だが、ホルマリンや水銀の人体への許容量は本来「0（ゼロ）」であるべきである。一般論だが、有害物質の経口摂取ならば「嘔吐」「下痢」という症状で排泄するということも有り得るが、否応なしに「皮下注射」されてはどうしようもない。

おわりに インフルエンザ HA ワクチンでは増殖を阻止できないから、“NA 阻害薬”などの抗ウイルス薬が処方されるのである。医師は 48 時間以内の抗ウイルス薬の服用を奨める。発熱期間が 1 日短くなるとか言いながら、ワクチンに増殖阻止効果・重症化阻止効果があるのなら、NA 阻害薬などの処方はいらないはずだ。

私が奨めるのは、インフルエンザ感染が分かたら抗ウイルス薬や解熱剤をもらわずに、家でゆっくり休んで養生することである。これが正しい対処法である。すでに、あなたの本来の・自前の免疫システムが発動しているからである。自分の免疫システム・自然治癒力を信じようではないか。ワクチンの打ち過ぎによって免疫システムが破綻してしまう話は次回にいたしましょう。